国立国語研究所学術情報リポジトリ

接続表現の二重使用と文章ジャンル：『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を利用して

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2020-03-18
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 馬場, 俊臣, BABA, Toshiomi
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002708

接続表現の二重使用と文章ジャンル

―『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を利用して―

馬場俊臣（北海道教育大学）

要旨

接続表現（接続詞及び接続詞的機能を果たす連語等）は，文章構造の分析（特に文の連接関係の分析）の重要な指標である。本稿では，接続表現の二重使用（特に異種併用）の出現の偏りと文章ジャンルとの関係の有無について試行的・探索的な調査分析を行った。二重使用に関する先行研究の成果を踏まえたうえで，BCCWJ（『現代日本語書き言葉均衡コーパス』モニター公開データ（2009 年度版））を利用し，「書籍」（NDC 第一次区分別）「国会会議録」「白書」「Yahoo! 知恵袋」の文章ジャンルに分けて調査分析を行った。その結果，二重使用は，全般的に「国会会議録」での使用の比率が高いなど接続表現の二重使用の使用率に偏りがあること，二重使用の組み合わせの種類（異なり）は多いが頻用される組み合わせはある程度限られることなどが明らかとなった。

キーワード：接続表現，接続詞，二重使用，BCCWJ，文章ジャンル

１．はじめに

文章は文の連続として成立しており，連続する隣り合った二文の間の広義の論理的関係である「文の連接関係」を分析することは，文章の展開的構造を把握するためにきわめて重要である。文の連接関係を捉える指標として，主に接続表現[1]（接続詞及び接続詞と類似の接続機能を持つ副詞や名詞，連語や文相当の表現なども含む）が利用される。

文の連接関係の分類は主に接続表現の意味用法の分類を手がかりとして行われてきており，原則的には，文と文との間に接続表現を想定し連接関係を判定することが多い。しかし，接続表現を想定できない二文があること，接続表現の二重使用があることなど，連接関係の分析に当たっての問題がある。

本稿では，接続表現の二重使用に焦点を当て，接続表現の二重使用（特に異種併用）の出現の偏りと文章ジャンルとの関係の有無について試行的・探索的な調査分析を行い，文章構造の分析の指標となる接続表現に関する基礎的知見を得ることを目的とする。

まず，２章で二重使用に関する先行研究の成果及び文章ジャンルと接続表現の出現傾向の関係に関する先行研究の成果を概観する。次に，３章及び４章でそれらの成果を踏まえたうえで，BCCWJ（『現代日本語書き言葉均衡コーパス』モニター公開データ（2009 年度版））を利用し，「書籍」（NDC 第一次区分別）「国会会議録」「白書」「Yahoo! 知恵袋」の文章ジャンルに基づいて接続表現の二重使用の実態の調査分析を行う。最後に，５章でその結果を示し今後の展望

をまとめる。

２．先行研究の概観

2.1　接続表現の二重使用

接続表現の二重使用には，(1)の「だがしかし」（逆接型＋逆接型）のように，同じ連接類型の接続表現が重ねて用いられる「同種併用」と，(2)の「そして一方」（添加型＋対比型）のように，異なる連接類型の接続表現が重ねて用いられる「異種併用」とがある。

（1）…三十八，三十九，四十，四十一と小坊主が柄杓で茶を汲むたびごとに，境内から声があがるようになった。たしかに不思議な釜だ。まだ茶が尽きない。だがしかし，こんな小坊主が光泉寺にいたというのも不思議である。(井上ひさし「腹鼓記」)(BCCWJ)[2]

（2）福江島一つとっても，堂崎の教会や水の浦の教会など，歴史も古く堂々たるものであった。そして一方，宮原教会のように，ほとんど民家のような家の上に，ぽつんと十字を乗せたものまである。（中西進「日本のかたち こころの風景から」）(BCCWJ)

同種併用の場合は，文の連接関係の認定は問題ない。しかし，二重使用の理由や二重使用の可能な連接類型やその際の順序などの検討が必要である。

異種併用の場合は，連接関係の認定をどう扱うかが大きな問題となる。二重使用による文脈展開のあり方を検討する必要がある。また，異種併用が可能な連接類型やその際の順序などの検討も必要である。[3]

2.2　二重使用の実態・傾向に関する研究成果

接続表現の二重使用の実例の提示及びその研究の必要性は，早くは，市川(1957)(1963)(1978)や森田（1958）などで示されてきた。その後，内省や少数の用例に基づいた部分的な指摘や分析は行われてはいたが，大量の用例に基づいて二重使用の可能な連接類型の組み合わせや二重使用の際の順序などを明らかにする研究は2000年以降にならないと現れない。[4]

本節では，二重使用に関する実態・傾向を分析した研究の成果を概観する。

まず，馬場（2003）（2006）では，市川（1978）の７種の連接類型[5]に基づき，すべての組み合わせの二重使用（同種併用・異種併用）の実例を可能な限り収集し，二重使用の可能な連接類型の組み合わせの実態と特徴を明らかにしている。市川（1978）で例示している「接続語句」90種類の組み合わせ（90種類×90種類＝8100組）を網羅的に調べている。調査範囲（コーパス）は，CD-ROM版『新潮文庫の100冊』（翻訳作品は除外），『朝日新聞　天声人語・社説1985 - 1991増補改訂版』，『朝日新聞　一面記事1989 - 1993秋』，『CD-毎日新聞‘93』，電子ブック版『日本大百科全書　改訂第２版』である。

二重使用の可能な組み合わせを表１のようにまとめている。なお，「×」（実例を見つけていない組み合わせ）は，あくまでも実例を見つけていない組み合わせであり，必ずしも不自然な組み合わせであることを示しているわけではないことに留意しておく必要がある。

全体的な傾向として，同種併用に関しては，逆接型，添加型，対比型，転換型の同種併用は見られたが，順接型，同列型，補足型は見られなかったこと，異種併用に関しては，大きく「逆接型　転換型」「添加型　対比型」「同列型」の順で先行しやすいこと，順接型，補足型の異種併用は極めてまれであることなどを指摘している。

表１　馬場（2003: 16）（2006: 140)の「接続詞の二重使用―接続類型別のまとめ」

先行／後続	順接型	逆接型	添加型	対比型	転換型	同列型	補足型
順接型	×	×	△	×	△	△	×
逆接型	△	○	×	×	×	×	×
添加型	×	○	○	○	○	×	×
対比型	○	○	○	○	○	×	×
転換型	×	△	×	×	○	×	×
同列型	○	○	○	○	○	×	○
補足型	×	×	×	×	×	×	×

注　「○」は実例を見つけている組み合わせ。
「×」は実例を見つけていない組み合わせ。
「△」は稀な用例あるいは限られた用例であることを示す。

次に，石黒（2005）は，新聞における接続詞の二重使用の実態を定量的に分析し，二重使用のタイプや使用理由，表現効果を考察している。調査対象語は，市川（1978）の 89 種類[6]の接続語句の出現頻度調査を行った結果，使用頻度 1000 以上となった 14 語の組み合わせ（14 語×14 語=196 組)である（「だから」「しかし」「だが」「でも」「ところが」「そして」「さらに」「しかも」「また」「一方」「さて」「たとえば」「ただ」「もっとも」の 14 語）。『毎日新聞 CD-ROM』2001 年度版を使用して調査を行っている。考察の結果，二重使用の際の相互承接の順序の原則は「転換型＞逆接型＞添加型＞順接型・対比型＞同列型」となること，また二重使用による表現効果として「接続詞の意味の限定・強調（類似の意味の接続詞を重ねる）」（そしてまた，だがしかし，しかし一方等），「複線的文脈の提示（前後の文脈の接続に複数の見方があることを示す）」（しかしさらに，しかしまた，しかしだから等），「多層的構造の提示（後続の文脈の入れ子型構造を示す）」（しかしたとえば，しかしだからこそ等）の三つが挙げられること，さらに「二重使用された接続詞は，書き手がとくに明確な表現意図をもって用いるものなので，使用頻度こそ少ないものの，とりわけ特徴的な文体分析の指標になる」ことを示している。

さらに，多田（2010）は，「複合接続詞の全体像」（一語からなる接続詞との共通性，文頭における副詞との語順，文法化の程度，文頭用法の語順など）を考察しており，調査分析の一部に接続表現の二重使用の調査が含まれている。「BCCWJ2008 年度版の書籍データ」を使用し，まず「BCCWJ 全体を Himawari で検索して語順の先後を調べる」ことを行い，そのうえで「これに複合接続詞を加え」て二重使用の傾向を示している。取り上げているのは，「が，そして，し

かし，しかも，じゃあ，あるいは，なお（猶），さらに（更に），かつ，また（又），ただ，いっぽう（一方）」の 12 語，及び「だが，でも，さて，ところが，ただし，ところで，まぁ，そこで，そうすると，そのときは，つまり，だから，それから，そうして，それで，だけど，で」の 17 語である。

先行しやすいのは「逆接」の接続詞と「そして」と「また・ただ」であること，後続しやすいのは「時間的な関係を表す接続詞」（それから等）と「ことがらを並べて比較するような接続詞」（その一方等）であること，形態的な制約もあること（「と」「だ・です・な」などで始まる複合接続詞は他の接続詞が先行しにくい）こと，「接続詞性の強い接続詞は文頭に位置し，構成的な意味が残る接続詞は文の内側へ語順が下がる」ことなどを指摘している。

以上のように，接続表現の二重使用に関する大量の用例に基づいた実証的な研究の成果が着実に示されてきているが，文章ジャンルによる出現傾向の違いについては明らかにされていない。

2.3　文章ジャンルと接続表現の出現傾向の関係に関する研究成果

本節では，文章ジャンルの違いと接続表現の出現傾向の違いとの関係を分析した近年の研究成果を簡潔に示す。

まず，村田（2000）（2002）（2007）では，詳細な統計的分析に基づいて，論述的文章（経済学教科書，物理学・工学・文学論文）に共通する語句として「したがって，すなわち，たとえば」等が挙げられること，文学論文は「つまり」「たとえば」などの頻度が高く，理工学論文では「したがって」などの頻度が高いことなどを指摘している。

高澤（2002）では，論説文では「しかし，だが，しかも」が多用され，随筆では「しかし，そして，だから」が多用されることを指摘している。

高橋（2005）では，日常談話では「で」「でも」が多用され，講義では「で」が多用されること，また，講義では「そうすると，そして」「つまり，たとえば」が多用されるのに対し，討論では「だから」「ただ」が多用されることを指摘している。

清水（2006）では，新聞コラム（主観的な談話）での接続詞の出現率は報道文（客観的な談話）の２倍以上であること，報道文では「逆接」と「添加」の接続詞が多くコラムでは「逆接」の接続詞が多いことなどを指摘している。

石川（2010）では，「現代日本語書き言葉均衡コーパス（検索デモンストレーション版）の書籍サブコーパス」を利用し，「NDC（日本十進分類法）に基づく 10 種類の内容ジャンル」別の「したがって」「だから」「こうして」「このため」「ゆえに」の５種類の接続表現の使用頻度に基づいた因子分析を行い，「状況的論理接続因子と主観的論理接続因子が抽出され，前者には「このため」「したがって」「こうして」が，後者には「だから」「ゆえに」が含まれることが示された。また，前者は社会科学などの論説性の高い内容ジャンルと，後者は文学や哲学などの随筆的内容ジャンルとそれぞれ関係することも示された。」としている。

以上のように，単独の接続表現に関しては，文章ジャンルの違いにより接続表現の出現傾向に違いがあることが明らかにされている。本稿の調査研究は，二重使用された接続表現を対象とし

て，文章ジャンルの違いによる出現傾向の違いを明らかにしようとするものである。

３．文章ジャンルによる偏りの分析（１）——高頻度組み合わせ調査

3.1　目的・使用コーパス

本研究では，接続表現の二重使用の文章ジャンルによる偏りの実態を明らかにするために，「高頻度組み合わせ調査」及び「高頻度語調査」と名付けた２種類の調査を行った。本章では，使用頻度が高いと予想される組み合わせを対象とした「高頻度組み合わせ調査」の結果を報告する。コーパスはBCCWJ（『現代日本語書き言葉均衡コーパス』モニター公開データ（2009年度版））を使用した（全文検索システム『ひまわり』使用）。なお，文頭（前文脈「。」）のみの検索を行った。また，「再び」の意味の「また」や「一層」の意味の「さらに」などのような副詞用法は目視により除外した。さらに，「しかし，だから害鳥である，ということにはならない。」のような包摂関係[7]にある例も除外した。

3.2　対象語の選定・調査方法

使用頻度が高いと予想される組み合わせの選定には，石黒（2005）及び多田（2010）の調査結果を利用した。石黒（2005）の調査結果の使用頻度上位５組（しかし一方，だが一方，しかしたとえば，そしてまた，ただ一方）及び多田（2010）の調査結果の使用頻度上位５組（あるいはまた，そしてまた，なおかつ，しかしまた，そしてさらに）の合計９組（１組は重複）をまず選んだ（「なおかつ」は副詞として扱われるが、ここでは多田に従い対象語に含める）。ただし，この９組では，すべての連接類型の組み合わせが考慮されていないため，独自の調査を行い，「また一方」「ただしかし」の２組を追加し，計11組を選定した（表２参照）。

独自の調査の方法を簡潔に示す。まず，BCCWJで市川（1978）に示されている90種類の接続表現の頻度調査を行い，７種の連接類型のそれぞれ上位１語（しかし，だから，一方，また[8]，ところで，つまり，ただ）を取り出し（表３参照），その７語の組み合わせ（７語×７語＝49組）の二重使用の頻度調査を行った（表４参照）。この二重使用の頻度調査の結果，相対的に頻度が高い「また一方」「ただしかし」の２組を追加した。なお，「しかし一方」「しかしまた」「ただ一方」は既に調査対象に含まれている。

表２　高頻度組み合わせの選定

	石黒(2005)		多田(2010)		本調査		
組み合わせ	頻度	順位	頻度	順位	頻度	順位	類型
しかし一方	**56**	**1**	6	26	**106**	**2**	逆接型＋対比型
だが一方	**36**	**2**	--	--	17	10	逆接型＋対比型
しかしたとえば	**21**	**3**	-	-	32	7	逆接型＋同列型
そしてまた	**18**	**4**	**363**	**2**	**243**	**1**	添加型＋添加型
ただ一方	**11**	**5**	0		11	11	補足型＋対比型
しかしまた	10	6	**106**	**4**	41	6	逆接型＋添加型
そしてさらに	9	7	**96**	**5**	**59**	**4**	添加型＋添加型
あるいはまた	-	-	**560**	**1**	**92**	**3**	対比型＋添加型
なおかつ	-	-	**332**	**3**	18	9	(連語相当・添加)
また一方（追加）	3	15	2	37	**47**	**5**	添加型＋対比型
ただしかし（追加）	0		22	15	19	8	補足型＋逆接型

注　「-」は対象外　「--」は詳細不明

表３　市川（1978）掲載の接続表現の頻度調査結果

類型	接続表現	頻度	全体順位
逆接型	しかし	21026	1
順接型	だから	6682	5
対比型	一方	2051	23
添加型	また	18237	2
転換型	ところで	563	46
同列型	つまり	4749	10
補足型	ただ	5591	7

表４　高頻度７語の組み合わせによる頻度調査結果

		先行						
		しかし	だから	一方	また	ところで	つまり	ただ
後続	しかし	-	0	1	1	0	0	**19**
	だから	8（だからこそ）	-	0	2（だからこそ）	0	0	0
	一方	**106**	0	-	**47**	0	0	**11**
	また	**41**	1	6	-	2	0	2
	ところで	0	0	0	0	-	0	0
	つまり	0	4	0	0	0	-	0
	ただ	1	0	0	0	0	0	-

3.3　使用頻度の調査結果

11 組の二重使用の使用頻度の集計結果を示す。

まず，各組の４ジャンル別の出現頻度は表５の通りである。なお，表中の「BK」「MD」「WR」「YC」は，それぞれ「書籍」「国会会議録」「白書」「Yahoo! 知恵袋」を表す。また，「書籍」の NDC 第一次区分別の出現頻度は表６の通りである。

表５　高頻度組み合わせ 11 組の出現頻度（ジャンル別）

組み合わせ	BK	MD	WR	YC	合計
そしてまた	93	149	1	0	243
しかし一方	59	26	18	3	106
あるいはまた	30	62	0	0	92
そしてさらに	43	15	1	0	59
また一方（追加）	14	25	8	0	47
しかしまた	30	9	0	2	41
しかしたとえば	27	3	1	1	32
ただしかし（追加）	2	17	0	0	19
なおかつ	6	10	0	2	18
だが一方	17	0	0	0	17
ただ一方	4	7	0	0	11

表６　高頻度組み合わせ 11 組の出現頻度（書籍 NDC 第一次区分別）

組み合わせ	0 総記	1 哲学	2 歴史	3 社会科学	4 自然科学	5 技術・工学	6 産業	7 芸術・美術	8 言語	9 文学	分類なし	BK 集計
そしてまた	5	13	8	21	9	1	0	3	4	27	2	93
しかし一方	1	4	6	17	4	2	1	4	3	15	2	59
あるいはまた	0	4	2	11	2	1	0	1	2	6	1	30
そしてさらに	0	8	7	7	2	1	2	1	1	13	1	43
また一方（追加）	0	0	2	8	0	0	0	1	0	3	0	14
しかしまた	0	7	3	8	0	0	0	1	2	8	1	30
しかしたとえば	0	5	4	6	1	3	1	1	2	4	0	27
ただしかし（追加）	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2
なおかつ	1	1	1	2	0	0	0	0	0	1	0	6
だが一方	0	2	0	3	0	1	0	1	0	10	0	17
ただ一方	0	0	0	2	0	1	0	0	1	0	0	4

3.4　分析方法

「そしてまた」を例にして，分析方法を示す。

まず，「使用率」を次の２種類に分けて算出する。

一つは，先行接続表現「そして」に対する使用率（「先行表現比」）であり，「二重使用の組み合わせの使用頻度　÷　先行接続表現の使用頻度　×　100」で算出する。もう一つは，後続接続表現「また」に対する使用率（「後続表現比」）であり，「二重使用の組み合わせの使用頻度　÷　後続接続表現の使用頻度　×　100」で算出する。

「合計」（平均）の２倍以上の使用率を示す箇所を「偏り」があると見做し注目する。表では，「合計」（平均）の２倍以上の使用率の箇所を網掛けで，2.5 倍以上を網掛け・斜体で示す。ただ，使用頻度が極端に少ない場合は使用率が高くても偏りがあるかどうかの判断が難しい場合も

あるので，使用頻度 10 以上の組み合わせには下線を付す（表７，表８参照）。

表７　「そしてまた」の先行表現比・後続表現比（ジャンル別）

	BK	MD	WR	YC	合計
そしてまた	93	149	1	0	243
そして	12987	1746	149	590	15472
また	8759	2163	5688	1627	18237
先行表現比	0.72	*8.53*	0.67	0.00	1.57
後続表現比	1.06	*6.89*	0.02	0.00	1.33

表８　「そしてまた」の先行表現比・後続表現比（書籍 NDC 第一次区分別）

	0 総記	1 哲学	2 歴史	3 社会科学	4 自然科学	5 技術・工学	6 産業	7 芸術・美術	8 言語	9 文学	分類なし	BK 集計
そしてまた	5	13	8	21	9	1	0	3	4	27	2	93
そして	231	1179	1211	2808	644	472	314	664	198	4980	286	12987
また	221	640	953	3250	783	604	412	379	178	1232	107	8759
先行表現比	*2.16*	1.10	0.66	0.75	1.40	0.21	0.00	0.45	*2.02*	0.54	0.70	0.72
後続表現比	2.26	2.03	0.84	0.65	1.15	0.17	0.00	0.79	2.25	2.19	1.87	1.06

3.5　調査結果――「合計」（平均）の２倍以上の使用率を示す偏り

以下，表９～表 18 に，「合計」（平均）の２倍以上の使用率を示す偏りが認められる組み合わせの集計結果を示す。なお，表中の「合計」は４ジャンル（書籍，国会会議録，白書，Yahoo! 知恵袋）の集計結果であり，「BK 集計」は「書籍」のみの合計である。

表９　「しかし一方」の先行表現比・後続表現比（ジャンル別・書籍 NDC 第一次区分別）

	MD	WR	合計	8 言語	分類なし	BK 集計
しかし一方	26	18	106	3	2	59
しかし	2155	944	21026	311	213	16885
一方	238	765	2193	20	11	1009
先行表現比	1.21	*1.91*	0.50	*0.96*	*0.94*	0.35
後続表現比	10.92	2.35	4.83	*15.00*	*18.18*	5.85

表 10　「あるいはまた」の先行表現比・後続表現比（ジャンル別・書籍 NDC 第一次区分別）

	MD	合計	8 言語	分類なし	BK 集計
あるいはまた	62	92	2	1	30
あるいは	378	1371	24	11	952
また	2163	18237	178	107	8759
先行表現比	**16.40**	6.71	***8.33***	***9.09***	3.15
後続表現比	***2.87***	0.50	***1.12***	***0.93***	0.34

表 11　「そしてさらに」の先行表現比・後続表現比（ジャンル別・書籍 NDC 第一次区分別）

	MD	合計	1 哲学	分類なし	BK 集計
そしてさらに	15	59	8	1	43
そして	1746	15472	1179	286	12987
さらに	596	4169	160	24	2435
先行表現比	**0.86**	0.38	**0.68**	0.35	0.33
後続表現比	2.52	1.42	***5.00***	**4.17**	1.77

表 12　「また一方」の先行表現比・後続表現比（ジャンル別・書籍 NDC 第一次区分別）

	MD	合計	BK 集計
また一方	25	47	14
また	2163	18237	8759
一方	238	2193	1009
先行表現比	***1.16***	0.26	0.16
後続表現比	***10.50***	2.14	1.39

表 13　「しかしまた」の先行表現比・後続表現比（ジャンル別・書籍 NDC 第一次区分別）

	MD	合計	1 哲学	8 言語	分類なし	BK 集計
しかしまた	9	41	7	2	1	30
しかし	2155	21026	1421	311	213	16885
また	2163	18237	640	178	107	8759
先行表現比	**0.42**	0.19	***0.49***	***0.64***	***0.47***	0.18
後続表現比	0.42	0.22	***1.09***	***1.12***	***0.93***	0.34

表 14　「しかしたとえば」の先行表現比・後続表現比（ジャンル別・書籍 NDC 第一次区分別）

	合計	1 哲学	2 歴史	BK 集計
しかしたとえば	32	5	4	27
しかし	21026	1421	1706	16885
たとえば	4738	279	235	3302
先行表現比	0.15	**0.35**	0.23	0.16
後続表現比	0.68	**1.79**	**1.70**	0.82

表 15　「ただしかし」の先行表現比・後続表現比（ジャンル別・書籍 NDC 第一次区分別）

	MD	合計	1 哲学	9 文学	BK 集計
ただしかし	17	19	1	1	2
ただ	1563	5591	177	1312	2791
しかし	2155	21026	1421	4971	16885
先行表現比	***1.09***	0.34	***0.56***	0.08	0.07
後続表現比	***0.79***	0.09	***0.07***	**0.02**	0.01

表 16　「なおかつ」の先行表現比・後続表現比（ジャンル別・書籍 NDC 第一次区分別）

	MD	YC	合計	0 総記	1 哲学	2 歴史	3 社会科学	BK 集計
なおかつ	10	2	18	1	1	1	2	6
なお	647	182	2829	25	63	151	451	1057
かつ	23	3	55		2	2	4	27
先行表現比	**1.55**	1.10	0.64	***4.00***	***1.59***	0.66	0.44	0.57
後続表現比	43.48	**66.67**	32.73	0.00	**50.00**	**50.00**	**50.00**	22.22

表 17　「だが一方」の先行表現比・後続表現比（ジャンル別・書籍 NDC 第一次区分別）

	合計	1 哲学	5 技術工学	9 文学	BK 集計
だが一方	17	2	1	10	17
だが	5128	231	118	3022	5097
一方	2193	61	71	153	1009
先行表現比	0.33	***0.87***	***0.85***	0.33	0.33
後続表現比	0.78	3.28	1.41	***6.54***	1.68

表 18　「ただ一方」の先行表現比・後続表現比（ジャンル別・書籍 NDC 第一次区分別）

	MD	合計	3 社会科学	5 技術工学	8 言語	BK 集計
ただ一方	7	11	2	1	1	4
ただ	1563	5591	541	80	44	2791
一方	238	2193	382	71	20	1009
先行表現比	**0.45**	0.20	***0.37***	***1.25***	***2.27***	0.14
後続表現比	***2.94***	0.50	0.52	***1.41***	***5.00***	0.40

3.6　文章ジャンルにより偏りが認められる組み合わせ

文章ジャンルにより偏りが認められる組み合わせについてまとめると次のようになる。

① 「国会会議録」で偏って使用される組み合わせが多い。これらの組み合わせは，全体で「添加型」「対比型」「補足型」の機能を果たしていると見られる。

・頻度 10 以上　2.5 倍以上

「そしてまた」（添加型＋添加型），「あるいはまた」（対比型＋添加型），「また一方」（添加型＋対比型），「ただしかし」（補足型＋逆接型）

・頻度 10 以上　２倍以上

「しかし一方」（逆接型＋対比型），「そしてさらに」（添加型＋添加型），「なおかつ」（補足型＋添加型）（全体で慣用的）

・頻度９以下　2.5 倍以上

「ただ一方」（補足型＋対比型）

・頻度９以下　２倍以上

「しかしまた」（逆接型＋添加型）

② 白書では，「しかし一方」が多用されている。

③ 書籍 NDC 第一次区分別では，「1 哲学」（「そしてさらに」「しかしまた」など）「8 言語」（「そしてまた」など）で偏りが見られるが，いずれも頻度が 10 以下である。たまたま使用されたとも考えられるが，他の区分では使用率が低いことは留意しておく必要がある。

４．文章ジャンルによる偏りの分析（２）――高頻度語調査

4.1　目的・使用コーパス

本章では，予め二重使用の組み合わせを限定しないで用例を調査する「高頻度語調査」の結果を報告する。この調査は使用頻度が高い接続詞が先行する組み合わせを対象とした調査である。使用コーパス（BCCWJ）や検索条件は前章の「高頻度組み合わせ調査」と同じである。

4.2　対象語の選定・調査方法

先行表現となる高頻度語（対象語）の選定は次の手順で行った。

まず，市川（1978）の 90 種類の接続表現の頻度調査を BCCWJ で行い上位５語を選定した。「しかし」（逆接型）（１位）（頻度 21026），「また」（添加型）（２位）（頻度 18237）[9]，「そして」（添加型）（３位）（頻度 15472），「でも」（逆接型）（４位）（頻度 7549），「だから」（順接型）（５位）（頻度 6682）の５語である。

この５語には，対比型，転換型，同列型，補足型の連接類型の接続表現が含まれていないため，それぞれの連接類型の使用頻度上位１語の計４語を追加した。「一方」（対比型）（全体順位 23 位）（頻度 2051），「ところで」（転換型）（同 46 位）（頻度 563），「つまり」（同列型）（同 10 位）（頻度 4749），「ただ」（補足型）（同７位）（頻度 5591）の４語である。[10]

さらに，「ところで」の二重使用例が極めて少ないために「さて」（転換型）（同 51 位）（頻度 479）を追加した。また，逆接型の接続表現の比較のために「だが」（逆接型）（同８位）（頻度 5128）を追加した。

以上の計 11 語を対象語として選定し，これらの語が先行表現となる二重使用の用例を収集した。後続表現は目視で抽出していった。その際，市川（1978）に示されている 90 種類の接続表現（以下「市川」と略称）以外にも，広く接続表現（多くは複合的）と認められる表現（以下「市川以外」と略称）も含めた。

なお，「しかし」を先行表現とする二重使用については「書籍」「国会会議録」「白書」「Yahoo! 知恵袋」の４分類での偏りとともにさらに書籍 NDC 第一次区分での偏りも調査したが，「しかし」以外を先行表現とする二重使用については「書籍」「国会会議録」「白書」「Yahoo! 知恵袋」の４分類での偏りのみを調査した。

4.3　調査結果・分析

4.3.1　「しかし」を先行表現とする二重使用の文章ジャンルによる偏り

調査結果及び分析方法の具体的な例示として，「しかし」を先行表現とする二重使用の場合を以下に示す。

まず，二重使用の組み合わせ（後続表現が「市川」の場合）の異なり組数は 40 組あり，そのうち，使用頻度（合計）10 以上の組み合わせを示すと表 19 のようになる。

また，二重使用の組み合わせ（後続表現が「市川以外」の場合）の異なり組数は 44 組あり，そのうち，使用頻度（合計）10 以上の組み合わせを示すと表 20 のようになる。

文章ジャンルによる偏りを明らかにするために，「しかし」の出現頻度（総数）に対する二重使用の比率を算出した。

表 21 の「しかし総数」は「しかし」の出現頻度，「しかし＋市川」「しかし＋市川以外」はそれぞれ「市川」「市川以外」を後続表現とする二重使用の出現頻度である。「しかし＋市川　比率」は「「しかし＋市川」　÷　しかし総数　×　100」」，「しかし＋市川以外　比率」は「「しかし＋市川以外」　÷　しかし総数　×　100」で求めた比率であり，「合計　比率」は「しか

し＋市川　比率」と「しかし＋市川以外　比率」の合計である。偏りを視覚的に明示するために，「合計」の比率の２倍以上となる場合は網掛け，2.5 倍以上となる場合は網掛け・斜体にしてある（表 21 には該当箇所はない。表 25 以降参照。）。

「しかし」は，「国会会議録」「白書」での比率が，「合計」の２倍以上にはなっていないが高くはなっており，多く使用されていることが分かる。表 22 に，「国会会議録」「白書」での使用頻度の高い組み合わせを示した。「しかし一方」「しかし同時に」などが多用されていることが分かる。

表 23 は，書籍 NDC 第一次区分別の表である。「1 哲学」「8 言語」での「合計　比率」が高くなっている。表 24 に，「1 哲学」「8 言語」での使用頻度の高い組み合わせを示した。「しかし同時に」「しかしまた」などの使用頻度が高い。「1 哲学」では「しかしだからといって」「しかしたとえば」などが多いことなど，「国会会議録」「白書」とはやや異なった傾向にあることが分かる。

「しかし」以外の他の先行表現についても同様の分析を行った。ただし，書籍 NDC 第一区分で細分類すると各欄の値が小さくなりすぎるため，「書籍」「国会会議録」「白書」「Yahoo! 知恵袋」の４分類での偏りのみを見ていく。

表 19　先行表現「しかし」の二重使用の使用頻度（合計）10 以上の組み合わせ（後続表現が「市川」の場合）

しかし＋市川	BK	MD	WR	YC	合計
しかし一方	59	26	18	3	106
しかしまた	30	9	0	2	41
しかしたとえば	27	3	1	1	32
しかし他方	17	7	7	0	31
しかしそのとき	22	0	0	1	23
しかし少なくとも	15	4	0	0	19
しかしやがて	17	0	0	0	17
しかしそれにもかかわらず	15	1	0	0	16
しかし逆に	12	1	1	1	15
しかしそのためには	8	2	2	0	12
しかしそもそも	10	0	0	1	11
しかしでは	7	4	0	0	11
しかしそれなら	9	2	0	0	11

表 20　先行表現「しかし」の二重使用の使用頻度（合計）10 以上の組み合わせ（後続表現が「市川以外」の場合）

しかし＋市川以外	BK	MD	WR	YC	合計
しかし同時に	54	22	4	0	80
しかしそれでも	45	3	1	3	52
しかしいずれにしても	22	20	0	0	42
しかしその一方	28	6	5	0	39
しかしだからといって	34	2	1	1	38
しかし結局	28	4	0	1	33
しかしそれにしても	18	5	0	0	23
しかし反面	7	5	1	0	13
しかしその反面	10	1	1	0	12
しかしそれと同時に	8	2	1	0	11
しかしそうはいっても	10	0	0	0	10
しかしそれでもなお	9	0	0	1	10

表 21　先行表現「しかし」の出現頻度（総数）に対する二重使用の比率（ジャンル別）

	BK	MD	WR	YC	合計
しかし総数	16885	2155	944	1042	21026
しかし＋市川	319	75	29	9	432
しかし＋市川以外	316	82	16	7	421
しかし＋市川　比率	1.89	3.48	3.07	0.86	2.05
しかし＋市川以外　比率	1.87	3.81	1.69	0.67	2.00
合計　比率	3.76	7.29	4.77	1.54	4.06

表 22　先行表現「しかし」の使用頻度の高い組み合わせ（ジャンル別）

	MD	WR
しかし一方	26	18
しかしまた	9	0
しかし他方	7	7
しかし同時に	22	4
しかしいずれにしても	20	0

表 23　先行表現「しかし」の出現頻度（総数）に対する二重使用の比率（書籍 NDC 第一次区分別）

	0 総記	1 哲学	2 歴史	3 社会科学	4 自然科学	5 技術・工学	6 産業	7 芸術・美術	8 言語	9 文学	分類なし	BK 集計
しかし総数	384	1421	1706	4870	1060	728	489	732	311	4971	213	16885
しかし＋市川	5	42	33	87	14	10	8	13	10	91	6	319
しかし＋市川以外	6	37	31	105	10	12	7	12	7	86	3	316
しかし＋市川　比率	1.30	2.96	1.93	1.79	1.32	1.37	1.64	1.78	3.22	1.83	2.82	1.89
しかし＋市川以外　比率	1.56	2.60	1.82	2.16	0.94	1.65	1.43	1.64	2.25	1.73	1.41	1.87
合計　比率	2.86	5.56	3.75	3.94	2.26	3.02	3.07	3.42	5.47	3.56	4.23	3.76

表 24　先行表現「しかし」の使用頻度の高い組み合わせ（書籍 NDC 第一次区分別）

	1 哲学	8 言語
しかしまた	7	2
しかしたとえば	5	2
しかし他方	5	0
しかしそのとき	4	0
しかし一方	4	3
しかし同時に	8	3
しかしだからといって	11	0

4.3.2　「また」を先行表現とする二重使用の文章ジャンルによる偏り（表 25 参照）

「国会会議録」での比率が高い。使用頻度が高い組み合わせは，「また一方」（添加型＋対比型）（書籍 14 回）（国会会議録 25 回），「また同時に」（添加型＋添加型）（書籍 24 回）（国会会議録 15 回），「またさらに」（添加型＋添加型）（書籍 12 回）（国会会議録 14 回）などである。

4.3.3　「そして」を先行表現とする二重使用の文章ジャンルによる偏り（表 26 参照）

「国会会議録」での比率が高い。使用頻度が高い組み合わせは，「そしてまた」（添加型＋添加型）（書籍 93 回）（国会会議録 149 回），「そしてさらに」（添加型＋添加型）（書籍 43 回）（国会会議録 15 回）などである。

4.3.4　「でも」を先行表現とする二重使用の文章ジャンルによる偏り（表 27 参照）

使用頻度は「書籍」に多い。「国会会議録」の比率は高いが，用例数は１例であり，見かけ上高くなっているだけである。

4.3.5　「だが」を先行表現とする二重使用の文章ジャンルによる偏り（表 28 参照）

使用頻度は，「書籍」に多い。「国会会議録」の比率は高いが，用例数は８例であり，見かけ

上高くなっているだけである。８例すべてが「だがしかし」（逆接型＋逆接型）である。
逆接型の接続表現の「しかし」「でも」「だが」については，国会会議録では「しかし」は多用されているが，「でも」「だが」はほとんど使われていないことが分かる。

4.3.6　「だから」を先行表現とする二重使用の文章ジャンルによる偏り（表 29 参照）

使用頻度は「書籍」に多い。「国会会議録」での二重使用は 21 例であり，比率は見かけ上高くなっているだけである。使用頻度が相対的に高い組み合わせは，「だからたとえば」（順接型＋同列型）（書籍 9 回）（国会会議録 5 回），「だからむしろ」（順接型＋対比型）（書籍 7 回）（国会会議録 2 回）などである。

4.3.7　「一方」を先行表現とする二重使用の文章ジャンルによる偏り（表 30 参照）

使用頻度は合計８でありごく少ない。「一方また」（対比型＋添加型）（書籍３回）（国会会議録３回）などがある程度である。

4.3.8　「ところで」を先行表現とする二重使用　の文章ジャンルによる偏り（表 31 参照）

使用頻度は合計８でありごく少ない。「ところでいったい」（転換型＋転換型）（書籍 3 回）（国会会議録 1 回）などがある程度である。

4.3.9　「さて」を先行表現とする二重使用の文章ジャンルによる偏り（表 32 参照）

「国会会議録」は二重使用は 26 例であり，比率は見かけ上高くなっているとも見られる。使用頻度が相対的に高い組み合わせは，「さてそこで」（転換型＋順接型）（書籍 1 回）（国会会議録 11 回），「さてそれでは」（転換型＋転換型）（書籍 1 回）（国会会議録 6 回），「さて次に」（転換型＋添加型）（書籍 0 回）（国会会議録 4 回）などである。

4.3.10　「つまり」を先行表現とする二重使用の文章ジャンルによる偏り（表 33 参照）

使用頻度は合計８でありごく少ない。「つまりたとえば」（同列型＋同列型）（書籍 1 回）（国会会議録２回）などがある程度である。

4.3.11　「ただ」を先行表現とする二重使用の文章ジャンルによる偏り（表 34 参照）

「国会会議録」での比率が高い。使用頻度が高い組み合わせは，「ただしかし」（補足型＋逆接型）（書籍 2 回）（国会会議録 17 回），「ただ一方」（補足型＋対比型）（書籍 4 回）（国会会議録 7 回），「ただそうはいっても」（補足型＋逆接型）（書籍 1 回）（国会会議録 5 回），「ただたとえば」（補足型＋同列型）（書籍 0 回）（国会会議録 5 回）などである。

表 25　先行表現「また」の出現頻度（総数）に対する二重使用の比率（ジャンル別）

	BK	MD	WR	YC	合計
また総数	8759	2163	5688	1627	18237
また＋市川	69	56	15	11	151
また＋市川以外	41	21	4	2	68
また＋市川　比率	0.79	**2.59**	0.26	0.68	0.83
また＋市川以外　比率	0.47	**0.97**	0.07	0.12	0.37
合計　比率	1.26	**3.56**	0.33	0.80	1.20

表 26　先行表現「そして」の出現頻度（総数）に対する二重使用の比率（ジャンル別）

	BK	MD	WR	YC	合計
そして総数	12987	1746	149	590	15472
そして＋市川	229	206	3	3	441
そして＋市川以外	44	19	1	0	64
そして＋市川　比率	1.76	**11.80**	2.01	0.51	2.85
そして＋市川以外　比率	0.34	**1.09**	0.67	0.00	0.41
合計　比率	2.10	**12.89**	2.68	0.51	3.26

表 27　先行表現「でも」の出現頻度（総数）に対する二重使用の比率（ジャンル別）

	BK	MD	WR	YC	合計
でも総数	4611	63	1	2874	7549
でも＋市川	55	0	0	7	60
でも＋市川以外	39	1	0	7	46
でも＋市川　比率	1.19	0.00	0.00	0.24	0.79
でも＋市川以外　比率	0.85	**1.59**	0.00	0.24	0.61
合計　比率	2.04	1.59	0.00	0.49	1.40

表 28　先行表現「だが」の出現頻度（総数）に対する二重使用の比率（ジャンル別）

	BK	MD	WR	YC	合計
だが総数	5097	20	2	9	5128
だが＋市川	90	8	0	1	99
だが＋市川以外	89	0	0	0	89
だが＋市川　比率	1.77	**40.00**	0.00	**11.11**	1.93
だが＋市川以外　比率	1.75	0.00	0.00	0.00	1.74
合計　比率	3.51	**40.00**	0.00	**11.11**	3.67

表 29　先行表現「だから」の出現頻度（総数）に対する二重使用の比率（ジャンル別）

	BK	MD	WR	YC	合計
だから総数	5095	1009	1	577	6682
だから＋市川	39	19	0	2	60
だから＋市川以外	1	2	0	0	3
だから＋市川　比率	0.77	**1.88**	0.00	0.35	0.90
だから＋市川以外　比率	0.02	**0.20**	0.00	0.00	0.04
合計　比率	0.79	***2.08***	0.00	0.35	0.94

表 30　先行表現「一方」の出現頻度（総数）に対する二重使用の比率（ジャンル別）

	BK	MD	WR	YC	合計
一方総数	1009	232	764	46	2051
一方＋市川	5	3	0	0	8
一方＋市川以外	0	0	0	0	0
一方＋市川　比率	0.50	**1.29**	0.00	0.00	0.39
一方＋市川以外　比率	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
合計　比率	0.50	**1.29**	0.00	0.00	0.39

表 31　先行表現「ところで」の出現頻度（総数）に対する二重使用の比率（ジャンル別）

	BK	MD	WR	YC	合計
ところで総数	363	105	8	87	563
ところで＋市川	4	3	0	0	7
ところで＋市川以外	1	0	0	0	1
ところで＋市川　比率	1.10	**2.86**	0.00	0.00	1.24
ところで＋市川以外　比率	0.28	0.00	0.00	0.00	0.18
合計　比率	1.38	**2.86**	0.00	0.00	1.42

表 32　先行表現「さて」の出現頻度（総数）に対する二重使用の比率（ジャンル別）

	BK	MD	YC	YC	合計
さて総数	528	336	94	0	958
さて＋市川	8	26	1	0	35
さて＋市川以外	3	0	0	0	3
さて＋市川　比率	1.52	***7.74***	1.06	0.00	3.65
さて＋市川以外　比率	0.57	0.00	0.00	0.00	0.31
合計　比率	2.08	7.74	1.06	0.00	3.97

表 33　先行表現「つまり」の出現頻度（総数）に対する二重使用の比率（ジャンル別）

	BK	MD	WR	YC	合計
つまり総数	4003	428	33	285	4749
つまり＋市川	4	2	0	0	6
つまり＋市川以外	0	2	0	0	2
つまり＋市川　比率	0.10	***0.47***	0.00	0.00	0.13
つまり＋市川以外　比率	0.00	***0.47***	0.00	0.00	0.04
合計　比率	0.10	***0.93***	0.00	0.00	0.17

表 34　先行表現「ただ」の出現頻度（総数）に対する二重使用の比率（ジャンル別）

	BK	MD	WR	YC	合計
ただ総数	2791	1563	41	1196	5591
ただ＋市川	11	40	0	1	52
ただ＋市川以外	17	20	0	2	39
ただ＋市川　比率	0.39	**2.56**	0.00	0.08	0.93
ただ＋市川以外　比率	0.61	1.28	0.00	0.17	0.70
合計　比率	1.00	3.84	0.00	0.25	1.63

５．まとめ

調査結果及び分析をまとめると，次のようになる。

① 接続表現の二重使用は文章ジャンルによる偏りが見られる。

② 二重使用は，全般的に「国会会議録」での使用の比率が高い。

③ 「国会会議録」での二重使用の組み合わせの種類（異なり）は多いが，頻用される組み合わせはある程度限られる。頻用される組み合わせは，全体で「添加型」「逆接型」「対比型」の機能を果たす場合が多い。

「そしてまた」（添加型＋添加型），「あるいはまた」（対比型＋添加型），「また一方」（添加型＋対比型），「ただしかし」（補足型＋逆接型），「しかし一方」（逆接型＋対比型），「そしてさらに」（添加型＋添加型），「なおかつ」（補足型＋添加型），「しかし同時に」（逆接型＋添加型）などが頻用されている。

④ 「白書」では，「しかし一方」が多用されている。

⑤ 書籍 NDC 第一次区分別では，「1 哲学」（「そしてさらに」「しかしまた」など）「8 言語」（「そしてまた」など）で使用率が高い傾向がある。ただし，使用頻度はいずれも低い。

今後の課題として，接続表現の単独使用の場合も含めて，接続表現の文章ジャンルによる偏りの要因を，文章ジャンルの違いによる文章構造の違いと関連させながら考察する必要がある。また，接続表現の単独使用と二重使用とでの連接関係の差異の検討に基づいた多層的な文章構造の解明が必要になってくる。さらに，文体（話し言葉的・書き言葉的）や文脈展開などの面からも接続表現の単独使用と二重使用の共通点と相違点を考察する必要がある。

注

注１　本研究では，一単語としての接続詞だけではなく，接続詞的な機能を持つ連語や副詞類も含めて広く対象に含めるために，「接続詞」ではなく「接続表現」という用語を用いる。

注２　用例は，すべて BCCWJ（『現代日本語書き言葉均衡コーパス』モニター公開データ（2009 年度版））を利用している。

注３　ごくまれに，下記の「しかし，また一方」や「そしてまた，たとえば」などのように，三重使用（以上）の例もある。

「○山口（和）政府委員先ほど申し上げました審議会の意見具申の際に，許可制を採用してはどうかという御意見が，ただいま先生から御指摘ございましたように出ておったことは事実でございます。しかし，また一方，規制強化は絶対に反対であるというような意見が，消費者の方々あるいは大型店の方々から出されておりまして，そういった点を総合勘案いたしまして届け出制でいってはどうかというように，ただいまのところ考え」（衆議院）（BCCWJ）

「（略）ビデオテープを含めまして，放送教材，印刷教材，いずれにいたしましてもこれはもちろん一般に市販をし普及を図って，国民各層の広範な教育需要にこたえるというようなことももちろん対応をする事柄でございます。そしてまた，たとえばこの放送大学がそれぞれ地方の国立大学と相提携をいたしまして，この放送大学の教育内容で，たとえば公開講座というような形で，それぞれ地方の地域の方々の御要望の強いような科目を取り上げまして，（略）」（参議院）（BCCWJ）

注４　接続表現（接続詞）及び接続表現（接続詞）の二重使用に関わる研究の流れについては，馬場(編著)（2010）及び馬場（2011）で概要をまとめている。

注５　市川（1978: 89-93）は，８種の連接類型を示しているが，８種のうちの「連鎖型」は「接続語句は普通用いられない」型であるため，それを除いた７種類を取り上げている。市川が挙げている各類型で使われる「接続語句のおもなもの」の詳細を次に示す。〔〕内は下位分類である。

順接型　〔順当〕＝だから・ですから・それで・したがって・そこで・そのため・そういうわけで」それなら・とすると・してみれば・では（以上，仮定的な意）　〔きっかけ〕＝すると・と・そうしたら　〔結果〕＝かくて・こうして・その結果　〔目的〕＝それには・そのためには

逆接型　〔反対，単純な逆接〕＝しかし・けれども・だが・でも・が」といっても・だとしても（以上，仮定的な意）　〔背反・くいちがい〕＝それなのに・しかるに・そのくせ・それにもかかわらず　〔意外・へだたり〕＝ところが・それが

添加型　〔累加，単純な添加〕＝そして・そうして　〔序列〕＝ついで・つぎに　〔追加〕＝それから・そのうえ・それに・さらに・しかも　〔並列〕＝また・と同時に　〔継起〕＝そのとき・そこへ・次の瞬間

対比型　〔比較〕＝というより・むしろ（以上，比較してあとのほうをとる）」まして・いわんや（以上，比較されるものをふまえて，著しい場合に及ぶ）　〔対立〕＝一方・他方・それに対し（以上，対照的な対立）」逆に・かえって（以上，逆の関係での対立）」そのかわり（交換条件）　〔選択〕＝それとも・あるいは・または

転換型　〔転移〕＝ところで・ときに・はなしかわって　〔推移〕＝やがて・そのうちに　〔課題〕＝さて（主要な話題を持ち出す）」そもそも・いったい（以上，原本的な事柄を持ち出す）　〔区分〕＝それでは・では　〔放任〕＝ともあれ・それはそれとして

同列型　〔反復〕＝すなわち・つまり・要するに・換言すれば・言い換えれば（以上，詳述・要約・換言）　〔限定〕＝たとえば・現に（以上，例示・例証）」とりわけ・わけても（以上，抽出）」せめて・少なくとも（以上，最小限度）

補足型　〔根拠づけ〕＝なぜなら・なんとなれば・というのは　〔制約〕＝ただし・もっとも・ただ　〔補充〕＝なお・ちなみに

注６　順接型の「では」と転換型の「では」を１種類として調査していると思われる。

注７　「しかし，だから害鳥である，ということにはならない。」では「しかし～ということにはならない」の「～」の部分に「だから害鳥である」が入っている。

注８　文頭に使われた副詞の「また」（「再び」の意）を排除しきれていない。「また」の出現頻度（総数）には副詞の「また」も含まれている。

注９　注８に同じ。

注 10　転換型は，「やがて」「それでは」「いったい」の３語の方が，「ところで」よりも使用頻度が高いが，「やがて」「いったい」は副詞とも見做されること，また「それでは」は指示詞的用法も含まれている可能性があることから，この３語は除外した。

参　照　文　献

馬場俊臣（2003）「接続詞の二重使用の分析―用例と各接続類型の特徴―」『北海道教育大学紀要　人文科学・社会科学編』53(2): 1-17.（馬場（2006）収録：110-142）.

馬場俊臣（2006）『日本語の文連接表現―指示・接続・反復―』東京：おうふう.

馬場俊臣(編著)（2010）『現代日本語接続詞研究―文献目録・概要及び研究概観―』東京：おうふう.

馬場俊臣（2011）「接続詞の二重使用に関わる研究について」『語学文学』49: 1-10.

馬場俊臣（印刷中）「接続表現の二重使用と文章ジャンルについて」『北海道教育大学紀要　人文・社会科学編』63(2).（2013 年２月発行予定）.

石黒圭（2005）「接続詞の二重使用とその表現効果」中村明・野村雅昭・佐久間まゆみ・小宮千鶴子(編)『表現と文体』：160-169. 東京：明治書院.

石川慎一郎（2010）「第９章　因子分析：データに隠れた要因を探る」石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠（編）『言語研究のための統計入門』：219-244. 東京：くろしお出版.

市川孝（1957）「文章の構造」岩淵悦太郎(編者代表)『講座　現代国語学Ⅱ　ことばの体系』：279-306. 東京：筑摩書房.

市川孝（1963）「文章論」『国語シリーズ No.57　文章表現の問題』：7-46. 東京：教育図書.

市川孝（1978）『国語教育のための文章論概説』東京：教育出版.

森田良行（1958）「文章論と文章法」『国語学』32: 91-105.

村田年（2000）「多変量解析による文章の所属ジャンルの判別―論理展開を支える接続語句・助詞相当句を指標として―」『統計数理』48(2): 311-326.

村田年（2002）「論理展開を支える機能語句―接続助詞，助詞相当句による文章のジャンル判別を通じて―」『計量国語学』23(4): 185-206.

村田年（2007）「専門日本語教育における論述文指導のための接続語句・助詞相当句の研究」『統計数理』55(2): 269-284.

清水まさ子（2006）「談話のジャンルと接続表現との関係―新聞の報道文とコラムを比較して―」『東アジア日本語教育・日本文化研究』9: 55-75.

多田知子（2010）「複合接続詞――文の文頭部分の階層性――」『国文論叢』42: 52-39,（要旨）68.

高橋淑郎（2005）「大学講義を対象とした類型的文体分析の試み」中村明・野村雅昭・佐久間まゆみ・小宮千鶴子(編)『表現と文体』：35-46. 東京：明治書院.

高澤信子（2002）「接続詞と接続表現との関係について―文章理解における有効性―」『立教大学日本語研究』9: 12-37.

付　記

本稿は，国立国語研究所共同研究「テキストにおける語彙の分布と文章構造」研究発表会（2011 年３月６日，国立国語研究所）における研究発表「接続表現の二重使用と文章ジャンル」の内容を加筆修正したものである。

２章及び４章の内容の一部は，馬場俊臣（印刷中）に発表予定である。